

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.9 September 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「救かる身やもの」
／堀内みどり..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (33)
ニューヨークの日系人と天理教伝道④
／尾上貴行..... 2
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (36)
「おさしづ」第4巻における教会事情と「道」
／澤井治郎..... 3
- ・ 日本語教育と海外伝道 (14)
日本語教育での教授法について①
／大内泰夫..... 4
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (12)
「ひとりぼっちのテーマソング」 単独者とは
／金子 昭..... 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (49)
弥生時代を再考する③ 登呂遺跡の平成と昭和
／桑原久男..... 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (28)
フルベール・ユール初代大統領①
／森 洋明..... 7
- ・ 現代宗教と女性 (25)
「優生保護法」改定阻止運動②
／金子珠理..... 8
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (2)
／八木三郎..... 9
- ・ 2019 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (5)
第3講：72「救かる身やもの」
／澤井義次..... 10
- ・ 図書紹介 (115)
『スーフィズムと老荘思想—比較哲学試論』
／澤井 真..... 11
- ・ おやさと研究所ニュース..... 12

「第 61 回印度学宗教学会学術大会」、天理大学で開催 (堀内みどり) / 「第 8 回南・東南アジア文化・宗教会議 (8th South and Southeast Asian Association for the Study of Culture and Religion)」に参加して (堀内みどり) / 2019 年度公開教学講座の案内

巻頭言

「救かる身やもの」

おやさと研究所主任 堀内みどり Midori Horiuchi

「明治十三年四月頃から、和泉国の村上の推進、時代的な要請が相俟って具体化幸三郎は、男盛りのさ中というのに、坐しました (『おやさと研究所五十年誌』参骨神経痛のために手足の自由を失い、激照)。名称を「天理文化研究所」、そして「宗しい痛みにおそわれ、食事が進まない状態となった。」

これは『稿本天理教教祖伝逸話篇』72「救かる身やもの」の冒頭です。その後、教祖 (1994) 11 月 14 日、50 周年計画委員会中山みきに会いに行った幸三郎は、教祖から「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」が発足し、『おやさと研究所五十年誌』のこの言葉をかけられます。たすけられた幸三郎は、教祖に「恩返し」をしたいと申し編纂発行と「公開講座」の開催が決まっていきました。翌年 5 月 28 日、50 周年記念の公開講演 (中島秀夫「現代宗教事情と布教・伝道」、芹澤茂「『たすけ』への参加—その理念と展望」) が行われ、その翌月の 6 月から 12 月にかけて毎月 25 日の午後道友社ホールを会場に「天理教の布教伝道—その理念と展望」を統一テーマとした連続の公開講座を開催しました。

『逸話篇』は、天理教を信仰している人々によって、とても親しみをもって、また、参加者からの要望もあり、公開講座は現在日々の来し方の指針を温めて読まれています。簡潔ではあるけれども、描かれた逸話の一つひとつからは、教えの親である教祖のありようが優しく伝わります。そして、教祖に直接接し、たすけられた人の“たすけられ方”が、今に生きる私たちに語りかけ、進むべき方向性を指し示してくれます。

さて、「救かる身やもの」と言われる一人ひとりは、「救けてもらった喜びで人を救ける」ことができます。それは“互いにたすけ”ということであり、布教伝道の根底にある信念と言っていいでしょう。信仰するということの、もともとの心の信託所です。同時に教祖は「世界の人が皆、真っ直ぐやと思っている事でも、天の定規にあってたら、皆、狂いがありますのやで。」 (『逸話篇』31「天の定規」) とも話されまして、我が身勝手な解釈にならないためにも、繰り返し繰り返し、教祖の言葉を学び体得する必要があります。

ここ数年、「おやさと研究所公開教学講座」(年 6~7 回、道友社 6 階ホール) は、『逸話篇』を取り上げています。『逸話篇』の先人の体験を学び、それを今に映していく教学研究の場ともなっています。「救かる身やもの」の逸話は、今年度第 3 回 (6 月) で取り上げられた逸話です。

昭和 17 年 (1942) 12 月 31 日、おやさと研究所 (中山正善 2 代真柱総裁、高橋道男所長) は、天理教教庁附属の研究機関として「天理教垂細亜文化研究所」の名称で設置され、研究者の養成、海外伝道

ニューヨークの日系人と天理教伝道 ④

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

2017年に設立40周年を迎えたニューヨークセンターは、現在、数多くの活動を行っている。これらの活動を支える上で大きな役割を果たしてきた、特につとめの勤修、おさづけの取り次ぎ、神殿ふしんに注目し、関係者の言葉から、そのセンター活動における背景や意義についてみてみたい。

つとめ

つとめは、天理教の救済と信仰実践において根幹をなし、日本のみならず世界中の教会や布教拠点でもつとめられているが、ニューヨークセンターでも、設立当初からつとめに対する真摯な姿勢が見受けられる。奥井俊彦氏（2代及び5代所長を歴任）の設立当初の述懐にその理由の一端がうかがえる。

一人の女性ははじめての参拝から引き続き毎月月次祭に欠かさず参拝されるようになりました。おつとめが終わるとすぐに帰られてしまい、ゆっくりとお話もさせていただけなく申し訳ないと思ひ、数カ月経ってお祭り以外の日に来て頂いてゆっくりお話をさせていただこうと、連絡を取り来て頂きました。マンハッタンに住む画家さんで大学でも教えておられる方でした。まず、毎月参拝して頂くのにゆっくりお話も取り次げず申し訳ないと謝りましたところ、「私は毎月このおつとめに参拝することをとても楽しみにしています。マンハッタンでの殺伐とした生活の中で、月一回このおつとめに合う事により心が和み、どれ程癒されるかわかりません。」と。当時のニューヨークセンターの月次祭は、参拝者もさほど多くおつとめを勤める奉仕者の服装もまちまちで、…教会の子弟が大半でしたが、つとめる態度もなあなあといった感じのおつとめでした。そんなおつとめでさえ、このように感じて毎月楽しみに参拝して下さる方がいらっしやることを知り、おつとめの意義をあらためて認識させていただいたことと同時に、教祖に対し申し訳なさで深くお詫びをいたし反省しました。（奥井2007年、4頁）

こうしてニューヨークセンターでは、つとめ方の改善、地歌の練習、神殿と参拝場の整備などが徐々に進められていった。

さづけ

教祖が世界たすけの手段として与えられた病気救済のおさづけの取り次ぎに関しても、ニューヨークセンターでは積極的な実践がみられる。深谷忠政氏のおたすけ活動がその一つの大きな経緯になったと考えられる。その様子を、奥井俊彦氏は以下のように述懐している。

「わしはなあ、どうしたらアメリカに道を広める事が出来るかなと色々な事をやってみたけど、何十年通ってやってみて、やっぱりこれしかないと思ったのは、おさづけ。これしかないということやったな。」（深谷忠政本部員の言葉、筆者註）。……4月頃（1987年、尾上註）だったと思うのですが、ニューヨークセンターにファックスが届きました。「本年6月にニューヨークにおたすけに行きたいと思ひます。お世話取り、よろしくお願ひします。スケジュールは、追って連絡します。深谷忠政」これをかわきりに、深谷先生のニューヨークおたすけ布教が10年間に渡り40数回続きました。……私の心に今でも鮮明に焼きついているお話があります。……

「なあ奥井君、キリスト教は二千年もの歴史がある。でも、あれも元はエルサレムという地中海沿岸の片田舎で始まったものや。が、その当時の世界の都、中心はローマやったんや。そこでキリスト教の布教師は皆、ローマを目指して布教したんや。でも殺されたり、諦めたりして布教師は皆、引き上げてしまった中に、ペドロという若い布教師がいて、最後彼が一人、踏ん張ったんや。そして道はローマに着き、やがてそこから世界に広まっていったんや。それを思うと天理教はまだ160年程の歴史や。今、世界の経済、文化の中心はここニューヨークや。ニューヨークに道がつかんと道は世界に広まらんや。あんた達はな、今は一人でも多くの人の魂におさづけを取り次いでくれ。そしたらその魂は、いつか必ず神様がおぢばに引き寄せて下さるんや。焦らず一人でも多く人におさづけを取り次がせてもらうんや。ニューヨークに道がつかんと世界に道は広がらんや。あんたペドロになつてくれ。」（奥井2004年、4～7頁）

神殿ふしん

ニューヨークセンターの神殿は、1987年の設立10周年の際、記念事業として神床と参拝場が拡張された。そして設立30周年に向けて、森下敬吾4代所長によって神殿ふしんが打ち出され、2008年に現在の神殿が完成した。このふしんに関して、天理教海外部北米・オセアニア課の一瀬孝治課長（当時）は次のように述べている。

まずこの神殿普請で私が一番驚き、また感激しましたことは、現地教友の方々のニューヨークセンターに対する「つくし・はこび」、特に普請に対する御供（普請丹精金）です。……当初の目標であった50万ドルを遥かに超え、倍の100万ドルをも超えたというのは本当にすごいことだなと思わずにはおられませんでした。これは森下敬吾所長（当時）を始め皆様方の普請に対する思いが次第の一つになり、強固な「本気モード」となって進み出した結果だと私は思っております。私はこの意味は非常に大きいと感じています。お道の教理の中で人に説くのが非常に難しい一つは「おつくし」だといわれています。まして日本以上に個人の生活状況が全てお金で計られていると思われる経済至上主義のアメリカで、それぞれの教友が金銭的な余裕などない中で少しでも普請金にとつくされる姿は、非常に尊いものだと言わざるを得ません。更に自らの御供のみならず、ある教友が未信者へのおたすけ先で生きたお金の使い方をといたところ、数万ドルをポンと御供下さった方がおられたというお話を聞かせて頂いたときに、それができたのはおたすけ人の誠実が伝わったればこそだろうと思うと、今回の不思議普請の進み方にただただ敬服し感謝するのみでありました。（一瀬2009年、9頁）

[参考文献]

- 一瀬孝治「センター神殿普請を通して感じたこと」『せいじん』2009年1月号、Vol.348、9～11頁。
- 奥井俊彦「9月月次祭神殿講話」『一れつ』2004年10月号、4～8頁。
- 奥井俊彦「4月月次祭神殿講話」『一れつ』2007年5月号、4～8頁。

「おさしづ」第4巻における教会事情と「道」

『おさしづ改修版』第4巻(明治29～32年)における教会事情の「おさしづ」について「道」の用例を整理する。第4巻には教会事情の「おさしづ」が3,147件ある。そのうち、「道」が用いられるのは63件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは19件である。なお、教会事情の「おさしづ」のうち、「同じお言葉は、巻末に一括し、五十音順に配列した」(凡例)と記されている。第4巻の目次をみれば、教会の設置、地方庁出願、普請等の願いの「おさしづ」が非常に多い。それらは巻末にまとめられている。

今回取りあげる、「おさしづ」本文に掲載されている教会事情の「おさしづ」は、会長の交代や教会と教会の関係など、教会内の治まりに関する「おさしづ」がほとんどである。したがって、教会を治めるために、どのような心で教会の歩みを進めるべきかということが主題となっている。

艱難苦勞の道が大事

教会の事情に対する「おさしづ」において、艱難苦勞の道が大事だと説かれる。

道が大事、これまで艱難苦勞の道が大事。一人でも聞き分けてくれ。(さ30・2・19 郡山分教会山陰支教会長外役員一同身上の願)

年限いろへ道のありて、もうどうなろうか知らんへ。その道連れて通った道よう聞き分け。難儀不自由苦勞艱難の道連れて通って、種と言う。……道という、道に我という理どうもならん。我は要らん。(さ30・11・27 飯田岩治郎の件に付、北分教会所の事情、会長初め役員五六名立会の上先々心得のため願)

このお言葉は、「苦勞せよ」という意味ではない。「これまで艱難苦勞の道」や「難儀不自由苦勞艱難の道連れて通って、種と言う」とあるように、周りの目にはどうなるとも分からない艱難苦勞の道中を、神が連れて通ってこそその今があるのだということを中心に治めるように諭される。

この道の元

それは「この道」の元、あるいは、始まりに立ち返って今の歩みを見つめ直すということである。

この道はどういう処から始まったか。……心の道が無くば、理は無いもの。今はどんな所あっても、元というは小さいもの。なれど、なかへの理やで。元分からんようではならん。ぢば始めた一つの理を聞き分け。指を折って数えてみよ。何年後数えてみよ。二年や三年で成ったものやあろうまい。誰がどう彼がどう、めんへ勝手という理があつてはならん。(さ32・5・31 前増野のおさしづよりだんへ本部役員協議の上城島分教会の事であろうとの事に付願(今分教会にては未だ会長定まらん付、……目下取定めに心配致し居ります。この処願))

さあへこの道という一つ道は皆容易な道やない。道という、道は、珍しい話から何を言うやらというような処から始めた道。皆雨の降る日もあれば又天気もある。これは道すがら。

……事情これまで互いへ道忘れんようへ、(さ32・12・29 高安分教会長松村吉太郎母さく身上よりおさしづあり、それより運び方高安分教会部内大縣支教会を分離の願……申し上げて願/押して、支教会を分教会に引き直しの願)

「この道」はどんなところから始まったか。元というは小さいもの。なれど、元が分からんようではならん。ぢば始めた一つの理を聞き分け。あるいは、「この道」という一つの道は、珍しい話から何を言うやらというようなところから始めた道である、と言われる。

道は一つ

こうして「この道」は教祖一人から、ぢばにおいて始められたのであり、その「道は一つ」であると繰り返し説かれている。

この道という、道は一つ教は一つ、遠い所それへ伝う心は日々受け取る中に、だんへ事情一つ、あちら事情こちら事情あつては心に楽しみ無い。(さ31・10・26 南海分教会長山田作治郎及び役員一同山田三女たみゑ出直し及び教会治め方事情願)

人の付けた道はいつまでも通るに通られん。世上は万筋の道、未だ仮の道、この道一条の道、元々一つに歩みへ、間違い重々取り違ひあつて一つさんげ。(さ31・10・14 東分教会治め方に付、山澤為造、永尾橋次郎出張中の処永尾婦部の上整理上に付願)

道は一つ、教はどうやこうやたゞ一つの理より理は無い。(さ31・10・19 榊井伊三郎係り郡山分教会と島ヶ原支教会との事情に付郡山より願)

第2巻、第3巻における教会事情の「おさしづ」の用例を整理した際に、「一つの道」あるいは「一つの理」ということが強調されていることを確認したが、ここでも「道は一つ」であることが説かれる。これは教会の治め方あるいは教会と教会の事情に対して説かれたことを考えれば、示唆的な言葉である。なかなか治まりがつかないという事情にあつて、「この道」の元に立ち返り、「道は一つ」であることを取り違えることのないようにと諭される。

道の理に心を合せる

その際、心を合せるということを教えられる。

道に間違いは無い。心の間違い。道の理に心の添わんというは、人間心の間違い。道の理と心の理と合わねばならん、合わさねばならん。(さ31・3・19 郡山部内津支教会事情願)

ただ、皆の心を合わせるというのではなく、「道の理」に心を合わせねばならないと説かれる。上記の「おさしづ」の言葉をみてくると、この「道の理」とは、「この道」の元、容易でないなかを長い年限掛けて親神が連れて通ってきたという「この道」の根本を指しているように理解できる。

このように第4巻の教会事情では、「この道」の元に立ち返って「道は一つ」であることが説かれ、その「道の理」に心を合せて歩みを進めるように諭されている。

日本語教育での教授法について ①

LL (Language Laboratory)

天理の語学教育を語る上で外せないのが LL (Language Laboratory) である。語学教育といえば LL という時代でもあったように感じている。LL に関しては、筆者の大先輩である天理教語学院の渡辺治則前校長と、別科に勤務していた頃の LL の長所・短所についてよく話をした。また筆者が現在、『グローバル天理』に連載しているのも、参考にと天理大学の LL に関する資料もいろいろ紹介していただいた。

『天理大学ふるさと会報 (二代真柱様 30 年祭記念特別号)』第 44 号 (1997 年) には、2 代真柱の海外布教にかけた思いや歴代の天理大学学長の話が詳しく書かれている。天理大学の前身である天理外国語学校は、語学を身につけると同時に、教を外国に広めるといふ海外布教の一環として設けられた。その目的を達成するために新しい教授法の研究が進められ、そうしたこともあって、新制大学になった後に LL を活用した語学教育が始まった。昭和 35 年頃、機械を利用した外国語教育は、すでに青山学院大学、京都学芸大学、南山大学、京都外国語大学などでも行われていたようだが、テープレコーダーの発達に伴い天理大学独自の LL の開発が始まったのである。

LL 機器の開発

LL を利用した天理大学の語学教育は、大きく 2 期に分けられる。第 1 期にあたる LL 機器の開発には、天理市内の電器店「天恵堂」の仲谷澄男・仲谷俊二両氏が関わり、数社のメーカーに制作を依頼し、試作機ができあがった。このシステムは高く評価され、全国の LL 教育関係者が天理に見学に来たようだ。第 2 期は、昭和 40 年の校舎移転につき、南棟校舎地下 1 階に新しく LL を設置した頃である。第 1 期から続く LL 教材の開発や教授法の研究の成果が新しい LL に注ぎ込まれて、機器もソニーの最高技術陣により作られた。これらの新しい LL は「天理大学方式」と当時呼ばれていたようで、日本の LL 機器のモデルともなったものである。天理大学で筆者が韓国語を学んだ時の LL は、この第 2 期のものだったと執筆しながら知ったが、ブースにもテープにも「SONY」の名が入っていたのをよく覚えている。筆者が別科勤務時代に使っていた LL 機器も、同様にこの頃のものであったように記憶している。教師が機器を操作するブースにはオープンリール式のテープレコーダーがあり、パーティションで仕切られた学生のデスクにはカセットテープレコーダーが埋め込まれ、これを制御するスイッチなどが配列されたコンソールがあったように記憶している。教室も空調が完備された防音の部屋であった。1980 年代の別科での LL や文型練習については、『天理大学別科日本語課程紀要』第 1 号 (1986 年) に、「文型練習と視聴覚教材の利用について」(渡辺治則) という論文があり、当時の様子を知ることが出来る。

語学の天理

余談になるが、天理大学の LL 教室の機器開発に携わった上記の天恵堂の仲谷俊二氏は、筆者の別科勤務時代の同僚でもあった仲谷宏巳氏の御尊父である。後に宏巳氏から聞いた話だが、御尊父の俊二氏はカセット式のテープレコーダーが一般にも普及し始めた頃、テープのトラックを分けて一方でネイティブの教師の音

声を録音し、他方で別のトラックに学生の音声を録音し、後でテープを再生した時に、自分の発音とネイティブの発音を比較して聞いたり、何度も自分の音声を録音したりすることができる機器の開発に携わっていたそうである。この開発には当時の天理大学教員の要望が取り入れられていた。仲谷俊二氏は LL 機器を利用して外国語を学んだ天理大学の卒業生は、各方面で外国語のスペシャリストとして即戦力になり、高い評価を得ていたと語っていたようだ。それを裏付けるかのように、天理大学からは、外交官のほか、各国の大使館や領事館の勤務者、あるいは通訳者を数多く輩出していることを筆者も聞いている。当時、外国語学部内のどの学科でも、授業の中でネイティブでない教員がネイティブの発音を学生に聞かせることができ、それを聞きながら発音を矯正していくことができる機器の開発は重要だったと思われる。仲谷宏巳氏からいろいろ話を聞いている時、「そういえば写真があった」と古いアルバムを出してきてくれた。俊二氏が撮影された写真のようで、教師用のコンソールが写っているのがわかる (写真 1)。



「写真 1 教師用コンソール」

これは昭和 51 年に写した

ものようだ。もう一枚は LL 教室の模型のような写真である (写真 2)。この写真を見ていると、技術者や教職員など関係者が集まって、いろいろ意見交換をしながら、より良い語学教育を目指し、開発を進めていたのだろうと想像できる。天理大学外国語学部の出身者は、同窓会などでも、よく学生時代は LL 教室で発音の矯正や文型の練習をやっていたと懐かしく話すことが多い。筆者もそうであるが、それほど LL 教室が活用されていたということである。



「写真 2 LL 教室の模型」

現在、天理大学の地下にあった LL 教室は、時代の流れでカセットレコーダーがパソコンに取って代わり、新たに CALL 教室として活用されている。機器の進歩は目覚ましく、アナログからデジタルに変わっていくのは、自然なことであろう。しかし、いつの時代でも、機器に詳しい技術者、教職員が語学教育のために協力し合って、それぞれ知恵を絞り、意見交換をしながら進めて行くことが大事だと、筆者は思っている。なぜなら、いかに優れた機能を持つ機器であっても、どの場面でもどのように機器を活用していくかを、技術者と相談しながら進めていかなければ、効果的な授業は行えないからである。

不思議なことだが、筆者が今、この原稿を書いている日の朝、通勤途中に偶然にも仲谷宏巳氏と会い、御尊父が 2 か月程前に亡くなられたことを聞いた。存命であれば、さらに興味深いことを聞けたかもしれないと思うと残念である。

「ひとりぼっち」が 14 回

『我が著作活動の視点』(1859 年)は、キルケゴールの死後に刊行された彼の実名著である。何より興味深いのは、彼はこの中で率直に自らの物語を語っていることである。そうした意味もあって、彼はあえて生前には刊行しなかった。実際、本書は、キルケゴールの著作活動のみならず、彼の伝記的秘蔵を読み解く鍵として読まれることが多い。しかしながら、もちろんこの著作も、他の著作と並ぶ彼の作品の一つであるとは言ってもない。

作品中とても印象深いのは、「ひとりぼっち」という言葉が集中して出てくる、あるページである。そこでは 14 回もこの言葉が登場する(田淵義三郎訳、白水社著作集第 18 巻 88 頁)。これらを全部挙げることはできないが、大略次のような感じである。

- どこにいても、だれの前でも、私はひとりぼっちであった。
- 最もおそろしい現実性さえも慰めになるような中で、私はひとりぼっちであった。
- 苦悩の中であって、私はひとりぼっちであった。
- 人間の言葉では言い表せないほど、私はひとりぼっちであった。
- 万人を狂気せしめるような弁証法的緊張において、私はひとりぼっちであった。
- 死ぬばかりの不安の中で、私はひとりぼっちであった。
- 誰にも私を理解させることがかなわない存在の無意味さの中で、私はひとりぼっちであった。

ここで「ひとりぼっち」に当たるデンマーク語は、ene (英語の alone) である。別な日本語訳では「独り」(大谷長訳、創言社著作全集第 14 巻 397～398 頁)となっている。たしかに「独り」の語のほうが、彼の重要な基本概念である単独者 den Enkelte につながりやすい。単語のシラブル数も同じように短く、言葉の含意もまたニュートラルである。

しかし、日本語として味のある表現を選ぶとしたら、「ひとりぼっち」のほうではないだろうか。「独り」の語が「独り生きる」主体的な生き方においても使えるのに対して、「ひとりぼっち」は自らの意に反して「一人になってしまった」という受動的運命をそこに反映している。それは、昨今の「無縁社会」や「社会的孤立」の問題ともオーバーラップしてくるのである。

神の前での生き方のカテゴリー

慧眼にも、作家の室井光広は、当該ページに着目して、別な意味合いであるが同じく「ひとりぼっち」だったアンデルセンにも共通する「ひとりぼっちのテーマソング」として、これを論じた(『キルケゴールとアンデルセン』第 20 章「影絵」参照)。この議論は、いわば“室井ワールド”の中で換骨奪胎された室井氏独自の文学論である。本稿では、キルケゴールに即しつつ、私なりに「ひとりぼっちのテーマソング」を語ってみたいと思う。

この ene が頻出するページは、「私の著作活動における摂理の役割」という章の中である。摂理とは、まさに人智を超えた神のはからいのことである。それは、人間の思いがどうであれ、

神がそのように導くままに現れてくる事態を指す。自分が ene となったことも、これを単に受身的な主観の状態として受け取るだけであれば、(神の思いのままに)「ひとりぼっち」にされてしまったということになる。他方、これを積極的な主体的生き方として受け取り直せば、(神の思いのままに)「独り」生きることになる。単独者という生き方がまさにそれである。

日本語だと、主観的と主体的とではずいぶん印象が異なるが、デンマーク語では同じ subjektiv という形容詞である。キルケゴールの思想を端的に表現する言い方に「主体性こそ真理である」とあるが、ここの主体性という言葉も、実は主観性と同じ Subjektivitet という名詞である。どの西欧語においても、主観と主体は同一の言葉である。そして、真理を客観的なもの(客体)の側にはなく、独り生きる者の主観的あり方(主体)に置くのが実存思想の最大の特徴なのである。

キルケゴールはまさにこのことを強調したのであった。忘れてはならないことは、主観的あり方(主体)の側に真理があることを保証する存在が神だということである。この神との逆説的な関わりの中で、人間の生き方は真理ともなれば非真理ともなる。それゆえ ene であることは、神の前に生きるという人間のカテゴリーなのである。

キルケゴール自身がそうであった。彼は著作活動を続けるにあたって、絶え間なく神の助けを必要とし、神以外に何の助けも求めなかった。彼の知己は神だけであり、彼と神の間には他の人間が介在する余地はなかったのである。

社会的孤立をはねかえす思想として

上述した「ひとりぼっち」の用例が示しているのは、もしも神との正しい関係がそこになければ、まさしく絶望そのものであるような、そういう人間の極限状態である。それを言い表すには、「独り」よりは「ひとりぼっち」のほうの方がやはり相応しい。

そこから「無縁社会」や「社会的孤立」の問題を逆照射してみれば、これらの問題は、人間関係の貧しさという世俗の問題の形を取った、超越的な存在(神仏)との関係の貧しさの姿だとも読み替えることができる。寂しさ、やるせなさを感じさせる「ひとりぼっち」の孤独の中で見失っているのは、実を言えば超越的存在である神仏との関係である。この関係が見失われているがゆえに、孤独感はいつそう耐え難い。

しかも、神仏とは絶対的な他者でもあるため、この関わりが無い、あるいは希薄になってしまった人にとって、本来相対的存在であるはずの人間や世間のほうが逆に絶対化されてしまうことになる。「社会的孤立」が往々にして「引きこもり」へと人を追いやりがちなのは、そうした誤れる絶対化の中で自分自身の中に退却させてしまうからである。だが、そうした退却路はどこまでも「ひとりぼっち」の袋小路にしか過ぎない。

我々は一人ひとりが実は皆、単独者である。それが「ひとりぼっち」の主観性の中に陥ることになるか、それとも「独り生きる」という主体性に生きることになるかは、神仏との関わりの中で自らをいかに正しく位置付けるかによる。実存思想とは、こうして「社会的孤立」を内面からはねかえす思想となるのである。

弥生時代を再考する ③ 登呂遺跡の平成と昭和

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

登呂遺跡と日本考古学協会

2018年10月、日本最大の考古学の学会、日本考古学協会の年次大会が静岡大学で開催され、弥生時代を代表する集落遺跡のひとつ、登呂遺跡を久しぶりに訪れた。登呂遺跡といえば、



写真1 現在の登呂遺跡

今から約70年前の戦後まもない時期に、学界をあげた発掘調査が行われ、歴史を塗り替えた、いわば、日本

考古学の「聖地」と言ってよい。登呂遺跡の公園は、JR静岡駅の南口からバスで約10分の閑静な市街地の一面にあり、緑化されて落ち着いたたたずまいの空間内に、復元された竪穴建物や掘立柱倉庫、水田などが配置され、背後には静岡市立の登呂博物館が建っている。その向こう側には、東西の交通の大動脈、東名高速道路の高架が間近に見える。折しも博物館では、「平成×登呂」と題した企画展が開催中で、平成の時代に行われた遺跡の再発掘調査と再整備、出土資料の重要文化財指定、博物館のリニューアルなどの出来事が、写真や関連資料を通して回顧されていた。現在の遺跡公園の姿も、博物館の展示内容も、「平成」の時代に新しく装いを変えたものなのだ。

博物館の展示がアピールするように、登呂遺跡の発見と戦後復興期の発掘調査、その後に続く遺跡整備は、「昭和史」の重要な一コマと言ってよい。遺跡が発見されたのは、戦争さなかの昭和18年(1943年)、軍需工場の建設がきっかけだった。遺跡の北辺が工場敷地となり、その土取りの最中に住居跡や水田の畦畔と見られる杭列が発見され、奈良県の唐古遺跡に匹敵する大発見として『毎日新聞』が報じた。このことで注目が集まり、静岡県による小規模な発掘と測量調査が行われた。唐古遺跡の発掘調査では、木製農耕具や稲粃などの出土資料によって稲作農耕文化の実態が明らかになったものの、住居跡や水田跡などは確認されていなかった。

戦後になり、遺跡の重要性を認めた学者が結集し、考古学・地理学・地質学・建築史学などの分野の専門家が加わった「登呂遺跡調査会」を組織して、昭和22年(1947年)の夏、約50日にわたる本格的な発掘調査を実施した。昭和23年(1948年)、この調査を契機として新たに設立された日本考古学協会内に、特別委員会として調査会が再組織され、科学研究費の交付を受けて、昭和23年(1948年)～25年(1950年)までの3年間、大規模な発掘調査が進められた。その結果、集落を構成する建物跡や水田跡などの遺構がはじめてセットで発見され、ムラの全容が明らかになった。このことは、新しい時代の象徴となる出来事だった。皇国史観を脱却し、考古学の視点で描かれた歴史が、一躍、表舞台に登場することになった。登呂遺跡の発掘調査によって明らかになった「稲作農耕が始まり、平和で明るい時代」という弥生時代のイメージが、敗戦直後の

国民に何かしらの希望を与えたのだ。矢板が並ぶ水田畦畔など、歴史教科書に掲載された登呂遺跡の写真が記憶に残っている人は多いと思う。昭和27年(1952年)、遺跡地は国の特別史跡に指定された。そして、発掘調査の報告書は日本考古学協会の編集

で昭和29年(1954年)に刊行された。報告書の写真を見ると、今とは違って遺跡の周辺は一面の田園風景で、その後の変化の激しさが印象的だ。



写真2 発掘終了直後の登呂遺跡

考古学者の戦死

さて、設立70周年を記念する日本考古学協会の2018年大会が静岡の地で開催されたのは、上記のような経緯による。大会の記念講演のひとつ、設楽博己氏(東京大学教授)による「弥生文化地域研究の黎明—江藤千鶴樹の人と学問—」は、登呂遺跡の発見・発掘と重なる時代の忘れられた歴史を掘り起こし、思い起こさせてくれる内容だった。江藤千鶴樹という人は、一般にはあまり知られていないが、戦前に、藤森栄一氏に導かれながら、森本六爾氏の主宰する東京考古学会の同人として活躍した考古学者で、藤森氏のエッセイ「考古学者の戦死」(『かもしかみち』、1967年)の主人公の一人だ。藤森氏と設楽氏によると、江藤氏が考古学の世界で活躍したのは、昭和10年(1935年)～15年(1940年)までの6年間に過ぎなかった。それは29歳の若さで沖縄戦で戦死したからだが、その短い期間に長短合わせて20編の論文を発表したという。弥生文化に関しては、とくに、駿河・伊豆の弥生土器、弥生文化の漁労活動をテーマに研究を進めた。

アメリカのワシントン州で移民の長男として生まれた江藤氏は、アメリカの市民権とダビデ・江藤チマキのクリスチャン・ネームも持っていたが、7歳の時に、日本の学校に入るために故郷の沼津に戻る。そして父の実家の裏畑で見つけた土器片から考古学に興味を持ち、國學院大學に進んで、本格的な研究活動を始める。藤森氏と江藤氏が知遇を得たのは森本六爾氏の病没後、昭和12年(1937年)、東京考古学会が拠点を大阪に移してからのことだった。唐古遺跡の発掘調査もすでに終了していたが、唐古国民学校で出土遺物の整理をしていた小林行雄氏の指導を受けたという。その後、昭和15年(1940年)には教師として沼津に戻り、考古学の世界から遠ざかっていたが、やがて召集され、昭和20年(1945年)6月20日、沖縄の摩文仁の地で二人の部下とともに切り込み隊の長として姿を消した。設楽氏の講演では、最後に、沖縄の平和祈念公園の「平和の礎」に刻まれた多数の戦没者名が映し出されたのだが、その中には江藤千鶴樹の名前が確かに含まれていた。

フルベール・ユールー初代大統領 ①

ブラザヴィルの南西約50kmのところ、「フラカリの滝 (Les chutes de la Foulakri) という場所がある。いくつもの大きな岩の間から大量の水が流れてくる滝の様子は人々を引きつけ、ブラザヴィル近郊では数少ない景勝地の一つである。



フラカリの滝

自然美の豊かな場所では、日本と同様にコンゴでもさまざまな伝説が生まれる。時としてそれは史実と重なることもある。たとえばこの滝では、フランスの植民地統治に抵抗した現地人がこの地で斬首されたのだが、その頭部はその後川岸に留まり、自身のための墓穴を掘ったことによって窪地ができ、そこに水が流れ込み今のような滝になったと言われている。この滝にまつわる伝説には、植民地から独立したコンゴの初代大統領となったフルベール・ユールー (Flubert Youlou) に関係するものもある。

ユールーは、1917年6月にプール地方のマディブ (Madibou) という村で生まれた。首都ブラザヴィルから南西約30kmの地点で、一帯に多く住んでいるラリ族 (Lari) の出身である。1926年、9歳のときにカトリック教会で洗礼を受け、フルベールという洗礼名を授かる。ブラザヴィルの神学校に進んだ彼は成績が優秀だった。その後現在のカメルーンで中等教育を了え、さらに神学を学んで、1946年には神父の資格を得る。その後約10年間、司祭 (Abbé) として活動をした。

宗教家としてのキャリアを辿る一方で、彼は政治に大きな関心を抱いていた。司祭でもあったフルベールには、当時植民地抵抗のシンボリックな存在であり、解放の「メシア」(救世主) として崇められていた同じラリ族出身のアンドレ・マツワ (André Matsoua, 1899～1942) のイメージが重ねられ、マツワの再来を信じるラリ族の人たちから大きな支持を得るのだった。しかし、1956年の仏領中部アフリカの代表者を選出する選挙では、3位という結果で敗北を喫した。

カトリック教会は彼が政治活動に関与することに反対していた。それでも政治に関わるユールーに対して、スータン (聖職の平服) を着ることを禁じ、宗教儀式を行うことも禁止した。またユールーは聖職者の独身性に反対するだけでなく、自らも一夫多妻であったこともあり、教会側としては要注意人物だったのかもしれない。こうした彼に向けられた「白人たち」の姿勢に対し、マツワの再来を信じるラリ族の人たちは、彼を「黒人の救世主」として一層見るようになっていったのではないだろうか。そこへさらに滝の伝説が加わることによって、彼の神秘性ははいよいよ高まっていく。その伝説によれば、彼はスータンを着たまま川で泳ぐことで先祖たちの力を得たというもので、その証拠に「川から出た彼のスータンは全く濡れていなかった」という。

1956年5月、ユールーはアフリカ人の利益を優先することを訴え、UDDIA (アフリカ人利益擁護民主連合) という政党を結成する。その政党のシンボルはワニであった。ワニは現地

では力強さを象徴するものであると同時に、滝の伝説にも関連している。それは「滝の近くにたたずむユールーの目前に一匹のワニが姿を現した」というものである。彼の政治的な影響は、出身地のプール地方だけでなく、ブエンザ (Bouenza) やクイル (Kuילו)、ニアリ (Niari) といったコンゴの南半分全域に及び、やがて彼は1956年11月の地方議会選挙でブラザヴィル、ポワント・ノワール、ドリジーといった重要都市で勝利し、自身はブラザヴィル市長に選出されるのだった。

彼にはジャック・オパンゴ (Jacques Opangault) という政敵がいた。コンゴの中央に位置するキュベット (Cuvette) の出身でボシ族 (Mbochi) である。MSA (アフリカ社会運動) という党を結成し、1946年にはすでに植民地議会の代表に選ばれていた。1957年3月の植民地議会選挙では、MSAはユールーが率いるUDDIAに勝利した。ただ、僅差だったので、同数の大臣を双方から出すこととなり、ユールーはこのとき農業大臣として入閣している。地方を回る機会が多いことがこの大臣選出の理由のようだ。

その後、派閥の分裂などによって1957年11月、UDDIAが多数派となる。1958年9月のフランス共同体への参加の可否の国民投票 (20巻1月号参照) では、99.3%の賛成で共同体への参加を決定している。

1958年11月、新しい国の制度を決める重要な議会が招集され、ユールーが首相になる。フランス共同体の参加に関する国民投票ではユールーとオパンゴは足並みをそろえたが、1959年の選挙の実施を巡って対立する。ポワント・ノワールでの抗争がブラザヴィルに飛び火し、ポトポト地区を中心としてユールーを支持するラリ族とオパンゴを支持するボシ族が武装衝突を起こし、死傷者数百名が出るまでに発展した。結局、独立後の国民議会となる選挙を同年4月に実施するが、周到な準備をしたユールー派が圧勝した。

1959年11月21日、ユールーは大統領に就任。そして翌年の1960年8月15日、コンゴはフランスから独立する。初代大統領となったユールーは、教会から禁じられていたスータンを身にまとい、自ら「Abbé」の称号を付けるのだった。

ユールーやオパンゴのように、独立前に政治を担うような層の人たちは、植民地統治下での教育で優秀な成績を修め、現地のエリートとして宗主国との関係も深い。植民地を全面的に否定するのではなく、逆にそれをうまく利用することによって、国内においての地位を確保するのである。また、フランス側も旧宗主国として、それまでのさまざまな既得権を保持し続けるため、独立後のアフリカの国々をコントロールしやすいような人を選び、後押ししたとも言えるだろう。

現在、フラカリの滝へは、悪路が続きアクセスは難しい。少なくともかつてのような観光地として人々が訪れることはないようだ。また、90年代以降に組織された反政府ゲリラがこの地域を中心に活動を展開していたので、治安の問題もある。そのゲリラのリーダーは、ユールーと同じラリ語を話し、仲間のなかで神格化されていると言われている。もしかしたら、滝にまつわる新たな伝説がすでに生み出されているのかもしれない。

「優生保護法」改定阻止運動 ②

胎児中心主義という戦略

前回(5月号)見たように、1970年代の「優生保護法」改定推進派(反中絶派)の動きは、女性たちと障害者たちの反対運動によって、かろうじて阻止されるに至った。しかしその後も、1970年代に改定を目指しながら失敗した勢力は、政治的な保守化・右傾化傾向が次第に強まりつつある中、生長の家を中心として再び改定運動を活性化させ始めた。この1980年代の2度目の改定推進運動はいかなる特徴を持っていたのだろうか。引き続き、主として荻野美穂著『女のからだ』(2014年)に依拠しながら、振り返ってみよう。

1980年代において改定推進派が掲げたレトリックは、「胎児の生命尊重」であった。この新たな戦略は、1970年代の法案に当初含まれていた「胎児条項」にはあえて言及せず、「『中絶は殺人』『胎児の生命尊重』という主張を前面に出し、無垢な犠牲者としての胎児への情緒的な共感に訴えることによって、中絶に対する規制を正当化するというものであった」と荻野は述べている。「胎児の生命尊重」戦略は、もっぱら女性や母親が、胎児の「殺人者」として、批難と告発の対象とされることを意味した。これは、ヘレン・ハーデカーが『水子供養』(原著1997年、邦訳2017年)においてキーワードの1つとして用いた「胎児中心主義(feto-centrism)」と言い換えることもできる。ハーデカーのいう、胎児中心主義的レトリックとは、「胎児の視覚的イメージに基づいて、胎児は『赤ん坊』以外の何ものでもなく、母親とは独立した命をもっており、一般成人と同じ条件で保護されるべきだとする」ものであり、女性たちの権利を制限するためにしばしば用いられる、とされる。

このような1980年代の戦略転換の背景の1つとして、荻野は「1970年代の法案が、当初そこに含まれていた「胎児条項」のせいで女性たちばかりでなく障害者たちからも激しい批判と攻撃の対象となり、結果的に改定に失敗したことへの反省があったものと考えられる」と指摘している。そして後述するように、もう一つの背景は「同時期のアメリカの中絶をめぐる状況との関連」であったという。

宗教と政治—日本とアメリカ

現在の生長の家は、エコロジー路線を掲げる、穏やかな教団である。しかし近年、かつての青年部関係者と日本会議とのかわりめをめぐり、世間の注目を浴びたことから推察されるように、以前の生長の家は政治活動に熱心であった。1929年に大本から分かれ、翌年谷口雅春によって創設された生長の家は、天皇と皇室を崇拝し、戦時中は翼賛体制に協力し、戦後も明治憲法体制の復活および憲法9条の廃止を掲げ、建国記念日の制定や元号法制化などを目指す、国家主義的な傾向がある。谷口の持論は、「避妊・墮胎の公認は性道徳を退廃させ家族制度を危うくするゆえに、優生保護法を改定し中絶を禁止すべきだ」というものであった。これらを全体的に眺めれば、生長の家における中絶反対は、教義に基づく「いのちの尊重」というようなものではなかったと思われる。アメリカの大統領選挙において、中絶、男女平等憲法修正条項(ERA)、同性愛の是非といったジェンダー・セクシュアリティ関連事項が焦点として利用さ

れてきたが、それとの類似点が見受けられる。

さて、優生保護法改正などを目指して、1964年に「生長の家政治連合」を組織しロビー活動に勤しんできた生長の家は、ついに1980年の衆参ダブル選挙において、熱心な信者、村上正邦を国会へ送り込むことに成功する。村上は、教団の二大目標である、明治憲法復活と優生保護法改正に向けて、「生長の家政治連合国会議員連盟」を発足させ、1982年3月の同総会には福田赳夫や中曽根康弘ら約200名の国会議員が参集した。同月、参議院予算委員会にて村上は、優生保護法にある経済条項の削除を主張した。その際、村上は、議場に胎児の写真パネルを持ち込んで見せたり、中絶反対の歌の歌詞を披露するなど、パフォーマンスを行ったといわれる。当時の鈴木善幸首相は、村上の期待に沿った趣旨の答弁をし、森下元晴厚生大臣もまた中央優生保護審査会を開き、改定が前向きに検討される。後に公衆衛生審議会に優生保護部会が新設され、審議はそこに移されるが、同部会の20人の専門家の内、女性は一人だけであったという。事態は差し迫った状況となった。

この間の、1980年代日米両国の政治には共通する点がある。日本では、1979年の家庭基盤充実政策を受け、1980年代を通じて、女性を家庭に縛り付ける様々な施策が打ち出された。一方アメリカでは、プロライフ派など保守勢力の支持を得た、ロナルド・レーガン大統領の2期にわたる政権下で、プロファミリー政策が進められていく。1973年の「ロウ対ウェイド判決」により、憲法の見地から中絶が認められることとなったアメリカでは、その後プロライフ派とプロチョイス派の対立が激化し、特に1980年代はプロテスタント原理主義などの「宗教右派」が中絶反対運動を主導していった。中絶クリニックへの襲撃もしばしば行われ、生命尊重(プロライフ)と矛盾した様相を呈するようになる。

テレビ伝道師ジェリー・ファルウェルが1979年に組織した「モラル・マジョリティ」は、軍拡支持・中絶禁止・同性愛反対・ERA反対の立場をとり、議会やホワイトハウスへも進出していった。このモラル・マジョリティと生長の家とは連携関係があったといわれる。ヴァジュアル戦略に長けたアメリカの中絶反対派は、胎児の写真や模型を多用し、胎児がいかにも「人間」であるかを強調したが、村上の国会でのパフォーマンスもここからヒントを得た可能性がある、と荻野は指摘する。スウェーデンの写真家レナート・ニルソンが発表した世界初の胎児写真を通して、胎児の姿は「臍帯一つで宇宙船につながれたまま宇宙空間を自由に漂っている『人間』の象徴となった」。一方の、胎児を宿す側の「女性」の姿は、どこへ行ってしまったのだろうか。

[参考文献]

荻野美穂『女のからだ』岩波新書、2014年。

荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会』岩波書店、2001年。

ヘレン・ハーデカー、塚原久美監訳『水子供養』明石書店、2017年。(ちなみに、本書における天理教教祖中山みきに関する記述は、文献および翻訳にいくつかの誤りが見受けられる。)

「碍」の字表記問題再考（2）

「碍」の字追加に関する政府見解

2012年5月29日の衆議院第180回国会において公明党議員より、内閣総理大臣宛に「碍」の常用漢字への追加に関する質問主意書が提出されている。それに対する政府の回答は次の通りである。

「碍」の常用漢字への追加に関する質問に対する答弁書（原文）

一から三までについて

現代の国語を書き表すための漢字使用の目安である「常用漢字表」（平成二十二年内閣告示 第二号）の字種は、文化審議会によって、その漢字が一般の社会生活において頻繁に使用され、他の熟語の構成要素ともなっていることなどを基準として選定されたものであり、現行の全ての常用漢字は、当該基準に合致していると判断されたものである。一方、「碍」については、同審議会によって、当該基準に合致していないと判断され、常用漢字表の字種として選定されなかったところである。

四について

御指摘の「漢字圏」の意味するところが必ずしも明らかではなく、また、諸外国におけるお尋ねの「使用例」について 詳細に把握しているものではないが、例えば御指摘の障害者の権利に関する条約（仮称）における「障害者」に当たる言葉は、中国語正文では「残疾人」とされており、大韓民国においては、ハングルで表記されているところであるが、漢字に置き換える必要がある場合には「障礙人」と表記されるものと承知している。

五及び七について

「障がい者制度改革推進本部」（以下「本部」という。）における「障害」の表記の在り方に関する検討結果によっては、「碍」の常用漢字表への追加に関して改めて文化審議会において検討することとされている。

六について

本部の下で開催されている「障がい者制度改革推進会議」においては、平成二十二年十二月十七日に「障害者制度改革の推進のための第二次意見」の取りまとめを行って以降、「障害」の表記の在り方を議題にはしていない。「障害」の表記の在り方については、これを検討事項とする本部において、意見集約の図り方も含めて引き続き検討を行ってまいりたい。

この一から三の回答のもとになった質問は、「一 常用漢字選定の基準を示されたい。二 現行の常用漢字はすべて「一」の基準を充たしていると考えるか。三 「碍」を新常用漢字表に加えなかった理由は何か。」である。これに対して文化審議会は、「一般の社会生活において頻繁に使用され、他の熟語の構成要素ともなっていることなどを基準として選定されたものであり、現行の全ての常用漢字は、当該基準に合致していると判断されたものである。一方、「碍」については、同審議会によって、当該基準に合致していないと判断され、常用漢字表の字種として選定されなかった。」という回答である。質問の三については「当該基準に合致していない」という記述だけで、一番聞きたい「碍」の字について、なぜ追加されなかったのかは今一つ、詳しく述べられていない。

四については、「中国、韓国等、漢字圏においては、我が国が法律等で表記する「障害者」と同様の使用例はあるか。」という質問であり、それに対する回答は国によって「残疾人、障礙人」な

ど表記が異なることは承知しているとのことである。

五及び七については、「内閣として『碍』を常用漢字表へ追加する意向はあるか。」「国は推進会議の後継組織である障害者政策委員会に「検討」「意見集約」を促していく考えはあるか。」の質問に対しては、取りまとめは内閣府推進本部で行うが、漢字の追加は文化審議会において検討するとの回答である。また、六については、今後も「障害」の表記について引き続き検討していくと述べている。

国会で審議されたこの答弁書を読む限りは、質問に対する回答が決定事項のみであり、その決定に至る経緯が詳しく記述されていないためよくわからない。

「碍」の字に対する意見募集

2010年の改訂に際して、文化庁文化審議会漢字小委員会（以下漢字小委員会）と内閣府障がい者制度改革推進会議（以下推進会議）では意見募集を行っている。そこでは常用漢字表の追加希望の上位にあがっていたのが「碍」の字である。推進会議の障害の表記に関する作業チームが行った調査では、表記に関して「障碍」と「障害」を支持する意見がともに約4割、「障がい」、「しょうがい」は1割という結果になっている。

漢字小委員会の意見募集では、「碍」の追加希望が86件寄せられており、これについて漢字小委員会では次のように整理している。

一つ目は、第2次世界大戦前は「障碍」という表記を用いており、本来の表記である「障碍」に戻すべきであるという意見。二つ目は、前述と同様に戦前は「障碍者」という表記しか存在しない。ゆえに、「障害者」ではなく、「障碍者」に戻すようにという意見。三つ目は、「障碍」と「障害」では意味が異なる。「害」は害虫とか、公害とか、災害と表記されるように悪い意味が含まれている。それ比して、「碍」には悪い意味はなく、大きな石の前で立ち止まる様を表すのが「障碍」であり、行く手を阻むという意味である。

寄せられた意見はいずれも、戦前使われていた障碍の表記に戻すべきであるというものである。加えて、当事者の心情として「害」の字で表記されることは不快であり、嫌悪感があるという意見である。

また、「障碍」の表記論争に対する障害者団体の声は「表記だけ変えても仕方ない」「差別や偏見を取り除くことが先決」とする根強い意見が存在している。しかし、なかには「言葉を換えると意識や社会のシステムが変わる」「『害』を不快に思う人がわずかでもいるなら配慮すべき」といった意見も寄せられている。

現在、自治体においては、「害」には否定的印象が強いとして、条例や部署名などにひらがな表記を混ぜた「障がい」を使用する例が各地で見られる。また、「碍」が常用漢字化されれば、それを使用する方向で検討するといった自治体もある。「障碍」の表記問題には、まだまだ表面化していない種々の問題が含まれており、そのことが「碍」の字表記論争に深く影響を与えている。いずれにせよ、「碍」が常用漢字表に含まれない文字である限り、公式に表記を検討することさえできない状況である。

2010年の常用漢字の改訂で多くの追加希望があったにもかかわらず、追加されなかった「碍」の字には何か深い意味がありそうである。

[参考文献]

内閣府『第5回障がい者制度改革推進会議議事録』2010年3月19日。

第3講：72 「救かる身やもの」

はじめに

教祖の逸話は、『逸話篇』として纏められており、いわゆる「エクリチュール」（書き言葉）として読ませていただくことができる。ところが元々は、教祖がおぢばがえりされた信者たちに説かれたお話、すなわち「パロール」（話し言葉）であった。信者たちは教祖から聞いた教えによって、それまでの生きかたを大きく転換された。逸話は親の代から子の代へ、さらに孫の代へと、世代を越えてパロールとして伝承されてきた。

私たちは教祖の逸話をとおして、原典のお言葉に込められた意味合いをより深く理解させていただくことができる。ここでは、72「救かる身やもの」の逸話を手がかりとして、今ここに生きていることの真の意味をめぐって、私たちの信仰の理解を深めていくことにした。

お言葉「救かる身やもの」に込められた意味

村上幸三郎という先人（天保12年〔1841〕～明治33年〔1900〕）は、泉東分教会（大阪府堺市）の初代会長であった。明治14年、幸三郎氏が講元となって真誠組が組織され、明治23年の高安分教会設置の際、部属の講社となった。明治25年、高安分教会部属の泉東支教会が設置されると、幸三郎氏が初代会長になられた。

幸三郎氏は、明治13年頃から、坐骨神経痛のために手足の自由を失い、激しい痛みで苦しんだ。そこで、竜田の近くの神南村（現・生駒郡斑鳩町神南）にお灸の名医を訪ねたが、不在であった。そこで、平素から聞いていた「庄屋敷の生神様」を頼って、教祖のもとに帰られた。すると教祖は「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」と、お声をおかけ下され、いろいろ珍しいお話をお聞かせ下されたという。幸三郎氏は、身も心も洗われたような、清々しい気持になって帰途についたという。

さて、教祖が「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」と言われたお言葉は、この世界が親神のご守護の世界であるという天理教のコスモロジー（人間観・世界観）を含意している。つまり、「神のからだ」と教えられるこの世界において、私たちが親神のご守護によって生かされて生きているという生の根源的事実性を理解することができる。「おふでさき」には、次のように記されている。

たんへとなに事にてもこのよふわ
 神のからだやしやんしてみよ 三・40・135
 このたびハ神がをもていでゝるから
 よろづの事をみなをしへるで 三・136
 めへへのみのうちよりのかりものを
 しらずにいてはなにもわからん 三・137
 しやんせよやまいとゆうてさらになし
 神のみちをせいけんなるぞや 三・138

教祖の「珍しいお話」（教理）を聞かせていただいて、幸三郎氏は「身も心も洗われたような、清々しい気持になって帰途についた。」自分自身の病いが「神のみちをせいけん（道教え・意見）」であることを悟り、澄んだ心になられた。帰り際に教祖から頂いたお水を、家に帰ってから、「なむてんりわうのみこと

なむてんりわうのみこと」と唱えて、痛む腰につけると、三日目には痛みは夢のようになくなり、ご守護をいただいたという。

「御恩返しの方法」—互い立て合いたすけ合い—

幸三郎氏は、おぢばがえりのたびに、身上は回復へ向かい、明治14年正月、本復祝いをおこなっている。おぢばへ帰った幸三郎氏は、教祖に「御恩返しの方法」をお伺いした。教祖は「金や物でないで。救けてもらい嬉しいと思うなら、その喜びで、救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。」と仰せられた。幸三郎氏は教祖のお言葉通り、たすけ一条の道を歩むことを心に誓った。

天理教のコスモロジーによれば、私たちは二重の生のつながりを生きていると教えられる。まず、親神と私たち人間は「をや」と子の呼応関係にあり、さらに、世界中の人間は皆、親神を「をや」と仰ぐ一れつ兄弟姉妹の関係にある。したがって、世界中の人間が心を入れ替えて、人々をたすける心になり、互いにたすけ合うとき、親神もその心をお受け取りくだり、どのようなたすけもしてくださる。

私たちの二重の生のつながりについて、「おふでさき」には、次のように分かりやすく記されている。

このさきハせかいぢううハ一れつに
 よろづたがいにたすけするなら 十二・93
 月日にもその心をばうけとりて
 どんなたすけもするとをもゑよ 十二・94
 また「みかぐらうた」には、次のように記されている。
 なにかよろづのたすけあい
 むねのうちよりしあんせよ 四下り目 7

「おかきさげ」にも、「人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かるという。」と論されている。この逸話において、村上幸三郎という先人は、親神のご守護によって救けていただいたことの喜びを周りの人々に伝えていった。教祖のお言葉通りに、たすけを求める人々に教えを説き、おたすけに奔走されたのである。

おわりに

この逸話から、私たちはお道の信仰のあり方を確認することができるだろう。まず、私たちが日々、親神のご守護によって生かされているという生の根源的事実性。このことは一見、当たり前のように思えるが、決して当たり前のことではない。この逸話をとおして、生きることの意味をしっかりと理解させていただくことが肝心であろう。さらに、「おさしづ」に「皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。」（明治30年12月11日）と論されるように、互い立て合いたすけ合って生きる—この生き方こそが、私たち一人ひとりにとって本来的な生き方であることをしっかりと理解させていただきたい。

このように教えに照らして、生きることの意味をとらえなおすとき、お道の信仰において「心通り」とか「心次第」ということがしばしば強調される。そのことについても、お道の信仰のあり方を理解するうえで重要なポイントであることに言及した。

『スーフイズムと老荘思想—比較哲学試論』(上・下)

(井筒俊彦著、仁子寿晴訳、慶應義塾大学出版会、2019年)

おやさと研究所講師
澤井 真 Makoto Sawai

本書は、イスラーム哲学および東洋思想の碩学として名高い井筒俊彦(1914～1993)の代表作の一つである英文著書、*Sufism and Taoism: A Comparative Study of Key Philosophical Concepts* (1983)の待望の邦訳である。

井筒俊彦とその著作

井筒俊彦は東洋思想のみならず、西洋思想にも深く精通した思想家であった。しかしながら、彼の名は以前、イスラームの聖典『コーラン』(岩波文庫)をアラビア語原典から最初に邦訳した慶應義塾大学教授として、ごく一部の研究者たちのあいだで知られていたにすぎなかった。彼が長年、海外で研究生活を送り、著作の大部分も英語で著していたこともあり、彼の名はむしろ日本よりも海外で広く知られていた。井筒の名が日本で広く知られるようになったのは、1979年、イラン革命によってイラン王立哲学アカデミーを離れて、日本への帰国を余儀なくされてからであった。『意識と本質』(1983)をはじめ、日本語で出版された著書は、数多くの読者に愛読されている。

井筒の日本語著作は、これまで「井筒俊彦著作集」(中央公論社、全10巻、1991～1993)によって知られてきた。近年、出版された「井筒俊彦全集」(慶應義塾大学出版会、全12巻+別巻、2014～2016)には、彼の論文などもすべて収録され、井筒が日本語で著した思想の全容を窺い知ることができる。しかし、井筒の日本語著作のみに触れてきた読者は、それだけでは「本当」の井筒を知らないと言えるかもしれない。筆者自身、海外の研究者たちとイスラーム哲学などについて議論するなかで、井筒俊彦を高く評価する人々そして、時には熱心な井筒ファンに幾度も出会ってきた。様々な研究分野の研究者たちにも読まれている井筒は、私たちの前に聳え立つ知の巨人である。井筒が英語で著した著書も、ようやく「井筒俊彦英文著作翻訳コレクション」(慶應義塾大学出版会)として順次邦訳され、本書の出版をもって完結した。ここに井筒思想の全貌を日本語で読むことができるようになった。

構成と概要

本書の構成は、以下の通りである。

- 第1部 イブン・アラビー(全17章 上巻)
- 第2部 老子と荘子(全12章 下巻)
- 第3部 結論—比較考量(全5章 下巻)

原著タイトルの副題に“A Comparative Study of Key Philosophical Concepts”と記されているように、鍵となる哲学的概念が比較検討されている。比較検討の対象として取り上げられているのは、イブン・アラビーによる存在一性論(イスラーム哲学)と老子と荘子の老荘思想(中国哲学)である。井筒の著書は、文献学的・思想研究的な視座にもとづき、時間と空間を越えた「^{メタ・ヒストリカル}超歴史的・^{トランス・ヒストリカル}言い換えれば歴史状況を越境する対話」を試みている。そこに通底する「久遠の哲学」(フォロソフィア・ペレニス)を意味論的に導き出そうとする大胆な試みである。

井筒は難解なイブン・アラビーの思想を、後代のイブン・アラビー学派の思想家であったカーシャニーの枠組みを援用しながら分析する。イブン・アラビーの存在一性論の特徴は、通常、「アッラー」(アラビア語で「神」)を意味するものは、何

らかのかたちで限定された状態の絶対者でしかない。むしろ、言語を越え、いかなるかたちでも描写できない絶対性の状態にある超越的な絶対者が想定され、その絶対存在は「ハック」(ḥaqq 絶対者)と呼ばれる。存在一性論では、この絶対者が「神」、「一者」、さらに「世界」などの存在や名前を通して顕われる過程を、自己顕現(tajalli)と呼ぶ。

世界の創造物が存在であるかぎり、絶対者と「存在」(wujūd)のレベルでつながっているのである。

さらに、イブン・アラビー思想の有名な概念のなかに、「完全人間」(al-insān al-kāmil)という語がある。この語は、神が人間のうちに、己れをもっとも完全なかたちで顕現させたことを示すものである。すなわち、人間は被造物でありながらも、同時に絶対者の顕れでもある。マクロコスモスとミクロコスモスを、一つの個体に同時に湛える存在こそが人間—それゆえに完全人間—なのである。

翻って、老荘思想において、たとえば『老子』(『老子道德経』)と呼ばれる古典テキストを中心に宇宙を捉えなおすとき、「渾沌」こそが存在の本来的なあり方であり、存在世界の本源である。老子はこの捉えようもない「無名」の次元を「道」と呼び、その極致を探究する。「道」とは、「何かで在る」(有)も「何かで在らぬ」(無)も超えたものであり、まさしくイブン・アラビーの存在一性論における「存在」と形而上学的に対応する。

道家で用いられる「一なる者」の語は、イブン・アラビーの捉える「一なる者」、すなわち絶対的に「一なる者」(アハドの次元)と、多を内包した「一なる者」(ワーヒドの次元)のそれぞれを包摂している。その意味で、両者はともに隠された不可視界(道家における玄や、存在一性論におけるガイブ)から、それぞれを顕われを論じている。井筒はこれら隠された存在論的レベルとその顕われの仕方を、二つの思想テキストを交錯させながら読み解きつつ、厳密な意味論的分析によって議論を進めていく。

ちなみに、諸言語に通暁した井筒の意図を読み解きつつ、翻訳を行うことはきわめて骨の折れる作業である。もちろん、本書の翻訳に際しては、アラビア語と中国語に関する知見が不可欠である。井筒の諸著作を精読し翻訳した仁子寿晴氏は、イスラーム思想研究のまさに鬼才であると言えるだろう。筆者も仁子氏が担当する大学の講義を聴講したことがあるが、講義には学外の研究者も参加していた。ときに、授業時間以上に長い授業後の「雑談」では、翻訳の試行錯誤がしばしば話題に上がっていた。「訳者あとがき」の紙幅では語り尽くせていない、訳者と編集者の5年以上に及ぶ奮闘を素直に讀みたい。



「第 61 回印度学宗教学会学術大会」、天理大学で開催

堀内みどり

標記大会が7月8日、9日の2日間にわたり、天理大学研究棟を会場に開催され、天理大学・おやさと研究所は大会実行委員会を組織して運営に当たった。また、研究所所員は大会スタッフとして大会運営に協力した。

「印度学宗教学会」は、1928年（昭和3）に東北大学印度学研究室・宗教学研究室の教官と学生によって始められた「印度学宗教学研究会」に端を発し、戦争による中断を経て、1950年に発足した「東北大学印度学宗教学会」を前身とする。1988年には「印度学宗教学会」と改称し、現在では、印度学宗教学の研究に関係する団体及び個人の研究上の連絡を図り、その発達普及を期することを目的に活動している。

第61回となる本年の学術大会は、「聖地再考」を大会テーマとし、7日午後には、山形孝夫宮城学院女子大学名誉教授が、「聖地再考—宗教人類学的視点から—」と題して、基調講演が行われた。続いて、公開シンポジウム「聖地再考」が開催され、澤井義次天理大学教授を司会に、以下の3名がそれぞれ発題した。

永尾教昭（天理大学学長）：天理教の聖地「ぢば」

奥山直司（高野山大学教授）：真言宗の聖地「高野山」

堀内みどり（天理大学おやさと研究所主任）：ヒンドゥー教の聖地「ベナレス」

また、7日午前、8日午前・午後には、26の研究発表が行われ、活発な質疑応答があった。天理大学からの発表は以下の通り（発表順）。

澤井真：イスラーム神秘主義における人間の位置

澤井義次：オットーの宗教学的パースペクティブとインド思想

澤井治郎：ラインホルド・ニーバーとビリー・グラハム

「第 8 回南・東南アジア文化・宗教会議 (8th South and Southeast Asian Association for the Study of Culture and Religion)」に参加して

堀内みどり

標記大会が5月13日から15日かけて、ダッカ（バングラデシュ）で開催され、「Revers & Religion: Connecting Cultures of South and Southeast Asia（川と宗教：南・東南アジアの文化とのかかわり）」をメインテーマとした会議に出席し、研究発表を行った。

12日は、プレコンファレンス・ツアーに参加し、ダッカ市内にある博物館などを見学した。13日からは、バングラデシュ・リベラルアーツ大学（ULAB）の考古学センター（CAS）を会場とし、

“Riverine Routes and Religious Links in South and Southeast Asia”（南・東南アジアにおける川のルートと宗教の関連）、“Major Rivers and their Valleys: The Lifeline of South and Southeast Asia”（主な河川とその谿谷：南・東南アジアのライフライン）など、15のサブテーマの下、15日までの3日間に150ほどの発表が行われた。堀内は、第2日目の午後、サブテーマ“Sacredness of Rivers, Riverfronts and Races”（河川・河岸・民族の聖性）の下、“Ganges River: Paradoxically Sacred and Polluted”（ガンジス：聖なるゆえに汚染するという逆説）という題目で発表した。ガンジス川はヒンドゥー教の聖都ベナレスを流れる聖なる川であるが、その聖性故に水質汚染が進行してしまう現状を鑑み、ガンジス川の汚染問題解決には宗教指導者による「聖」の再解釈と指導力が必要だと述べた。

大会後には、2～3日間の世界遺産を巡るポストコンファレンス・ツアーが用意されていて、事前に申し込んでいた参加者がツアーに出発した。



見学したバングラデシュの遺跡—ビビ・パリの墓
バングラデシュのタージ・マハールとも言われる

天理大学おやさと研究所
2019年度公開教学講座

信仰に生きる

『逸話篇』に学ぶ（5）

場所：天理教道友社6階ホール
時間：午前10時～11時30分
事前予約不要・来聴無料

- 第4回 9月25日（水） 尾上貴行
58話「今日は、河内から」
- 第5回 10月25日（金） 島田勝巳
71話「あの雨の中を」
- 第6回 11月25日（月） 堀内みどり
73話「大護摩」

グローバル天理
第20巻 第9号（通巻237号）

2019年（令和元年）9月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan